

手紙でたどる明治時代の移民生活

～紀三井寺村岩崎家文書から～

和歌山県立文書館寄託の岩崎家文書は、江戸時代には紀三井寺村（現和歌山市紀三井寺）の庄屋を、明治時代には紀三井寺村（明治22年〔1889〕、三葛村・紀三井寺村・内原村・布引村・毛見村が合併）の村長や村会議員などを輩出した家の文書です。

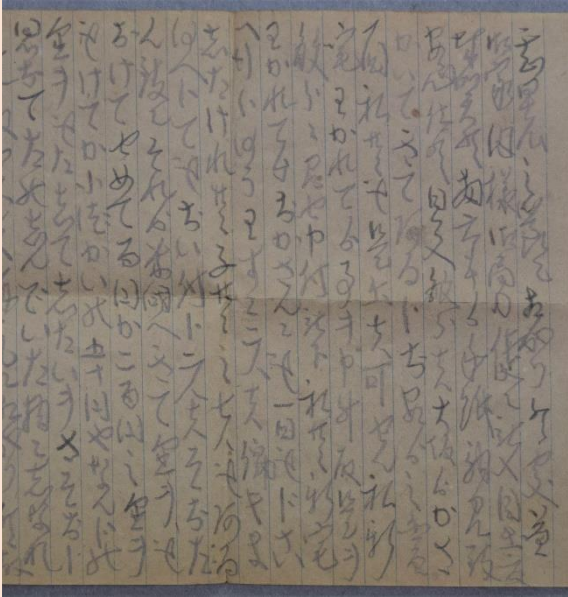
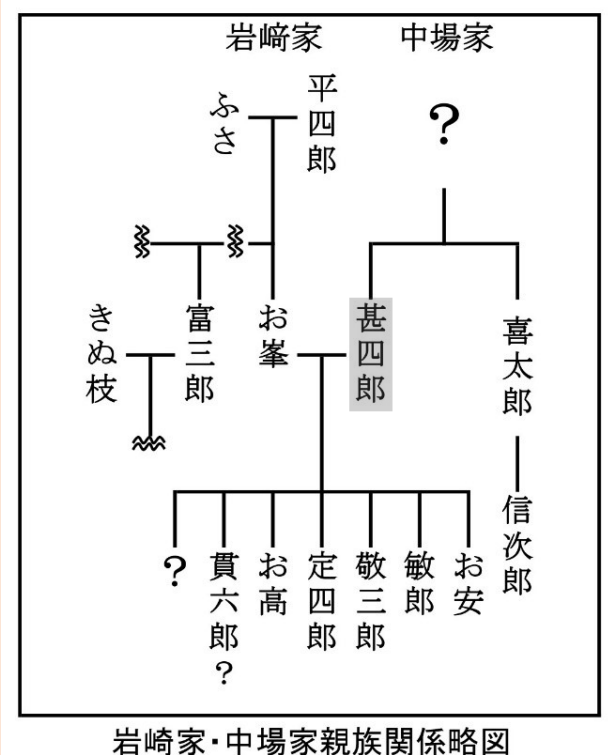
村政などに関する資料が多く残されていますが、明治時代から大正時代にかけて海外に渡った和歌山県人、とくに紀三井寺村出身者からの手紙なども200点以上残されています。

差出人には、紀三井寺村における移民先駆者ともいえる西亀之助をはじめとして、アメリカで財を成した者、農地経営をしていた者、農業に従事した者など様々な経歴をもつ人物がいました。紀三井寺村は、多くの移民を海外に送り出した地域だったことがうかがえます。

本展示では、明治25年（1892）に紀三井寺村からアメリカへ渡り、同地で4年を過ごした岩崎甚四郎が、岩崎家へ送り続けた手紙を中心に取り上げます。

手紙は50点以上を数え、在米中の日々の暮らしの様子、出来事について、喜怒哀楽の感情を交えて記したもので、彼の暮らしぶりが浮かび上がってきます。明治時代の一移民の生活がどのようなものだったのか、甚四郎の手紙からみていきましょう。

岩崎甚四郎が渡米した理由



文書番号810-51-1〔近況報告につき書状〕
（年未詳）7月25日
差出：新宅（岩崎甚四郎） 宛先：本宅（岩崎富三郎）

甚四郎は、もともと紀三井寺村の中場家の人で、明治5年（1872）、岩崎家のお峯と結婚して岩崎家に婿入りし分家しました（新宅）。

当時の岩崎家の当主はお峯の弟富三郎で（本家）、同村の村長や村会議員を務めています。甚四郎の義弟にあたり、アメリカからの甚四郎の手紙の多くは富三郎に宛てて送られたものです。

甚四郎が渡米を思い立った理由は、後年アメリカ在住の甚四郎から富三郎に宛てて送られたこの手紙から判明します。文面には甚四郎の息子敏郎に対して次のように伝えてほしいとあります。

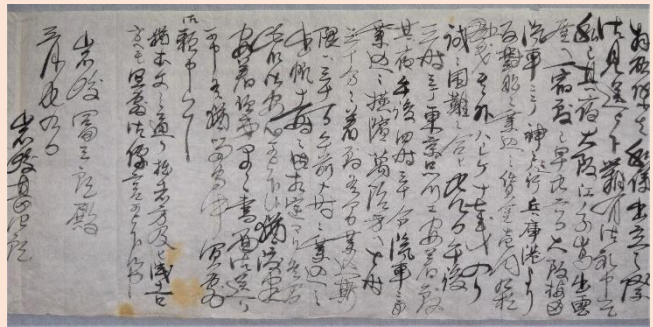
「私（甚四郎）が分家してからはお母さん（お峯）と二人で働いていたが、子供が7人いるため収入が追いつかず、二人で相談して、私がアメリカでお金を儲けて、小遣いを持たして「したい（=子妻か）」を誘おうと思っていた」。

甚四郎は、家庭の経済的事情を要因としてアメリカへ渡ることを計画したのでした。

アメリカに到着するまで



文書番号657 海外旅券下付願
明治25年(1892)3月21日 差出:岩崎甚四郎 宛先:大阪府庁



文書番号810-41【横浜到着につき書状】
明治25年(1892)3月29日 差出:岩崎甚四郎 宛先:岩崎富三郎

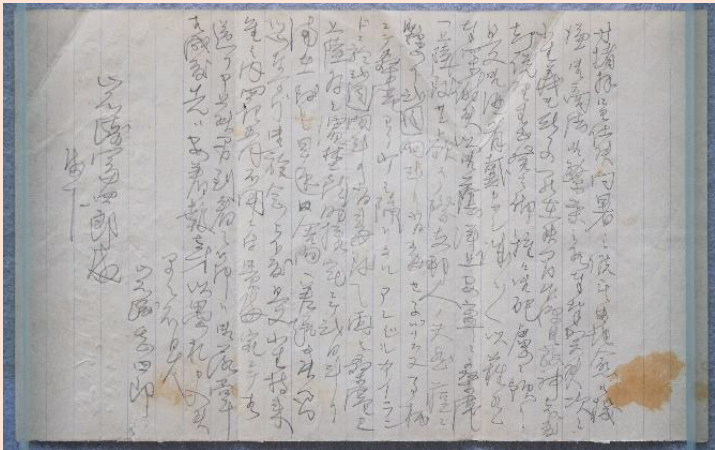
現在私たちが国を行き来するにはパスポートが必要ですが、それは明治時代も同じでした。

明治25年(1892)3月21日、このとき45歳の甚四郎は、大阪府庁宛てに「海外旅券下付願」、すなわち旅券発行の申請書を提出します。申請時の渡航目的は「農業実験」(農作業従事)、渡航先は「亜米利加国」(アメリカ合衆国)と記入しています。紀三井寺村村長山崎徳次郎と和歌山県知事沖守固の奥書を添えて提出された申請書は、4日後の25日には大阪府知事山田信道の名をもって許可されました。

3月25日、旅券を取得した甚四郎は、その日のうちに出国のための行動に移ります。この手紙には、大阪を出て、横浜でアメリカ行きの船に乗るまでの甚四郎の行程が記されています。

- 3月25日 夜、大阪で一泊。
- 3月26日 大阪梅田から汽車で神戸まで向かい、兵庫港で乗船。
- 3月28日 午後3時、東京品川に到着。
午後4時半、汽車に乗車。
午後7時半、横浜に到着。

3月31日 午前11時、アメリカ行きの船に乗り、横浜を出航予定。
28日に横浜に到着した甚四郎は、翌日富三郎宛てにこの手紙を出しており、見送りの礼と、大阪から横浜までの道中の様子について知らせました。

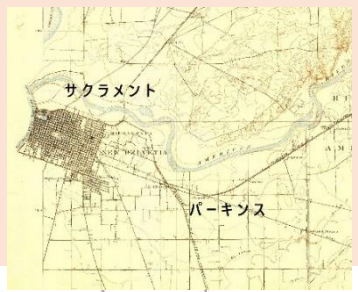


文書番号681【桑港上陸につき書状】
明治25年(1892)5月10日 差出:岩崎甚四郎 宛先:岩崎富三郎

3月31日に横浜を出航した船は、4月16日午後11時に「桑港」(現カリフォルニア州サンフランシスコ)に到着しました。しかし、この手紙によれば、同じ船に天然痘の感染者が発生したため「アンジェルアイランド」(エンジェルアイランド)という島で衛生予防、消毒のため2週間ほど待機させられることとなりました。

エンジェルアイランドには、明治43年(1910)、移民の入国審査、記録、検疫などを目的としてサンフランシスコ移民局が設置されますが、それ以前から検疫、隔離などが行われていたことが分かります。

地図 サンフランシスコ周辺図
サンフランシスコ拡大図(1895)
(Department of the Interior/USGS より一部加工)
サクラメント拡大図(1892)
(Department of the Interior/USGS より一部加工)

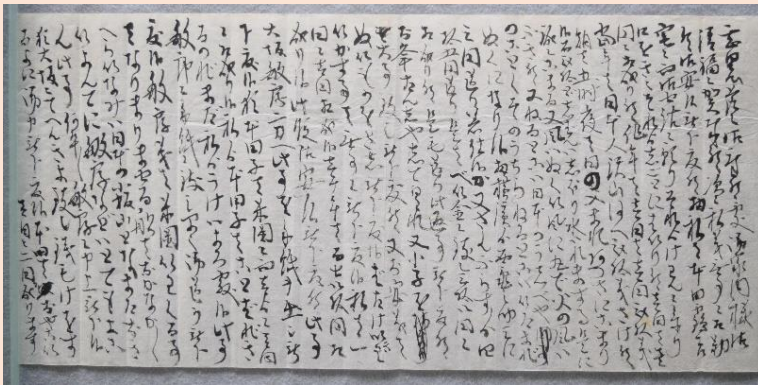
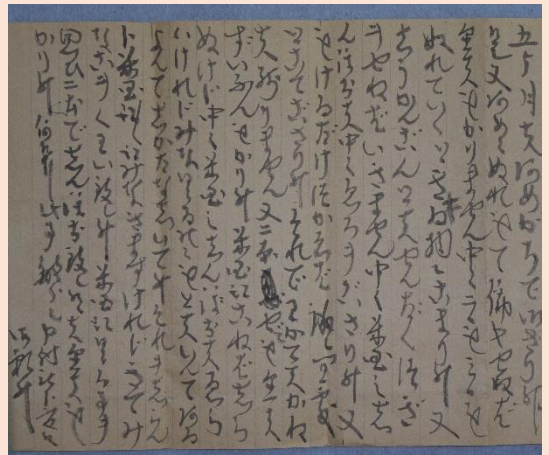




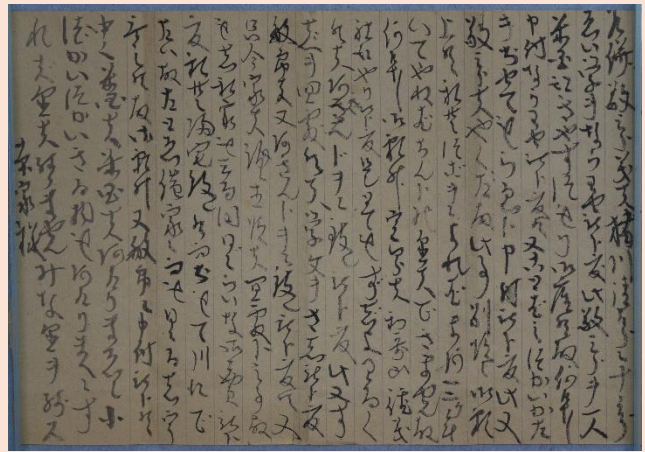
「メーユ-中村氏の葡萄園」
和歌山市民図書館移民資料室蔵
開原五雨編『櫻府平原之錦』、桜錦社、1911、34頁

サクラメント地域に存在した葡萄園です。甚四郎が働いていた場所もこのような広大な農園だったかもしれません。

明治26年(1893)以前、甚四郎がどこで働いていたかは具体的にはわかりませんが、同年夏ごろに、より多くの稼ぎを求めて、日本人移民が多く居住する「さくらめんとラ」(現カリフォルニア州サクラメント)に移っています。
サンフランシスコから北東に120kmほどの位置にあるサクラメント周辺地域は、晴天が多く気候温暖で果物や野菜の栽培に適しており、河川が流れ肥沃な土地をもっていることから農業が盛んで、この地域の移民には農園の経営や農作業に従事する人たちが多くいました。手紙に果物の豊作・不作によって賃金が変わることが記されていることから、甚四郎も果樹園で働いていたと思われます。



文書番号673[近況報告につき書状]
(年未詳)5月27日 差出:岩崎甚四郎 宛先:岩崎峯



文書番号810-6[近況報告につき書状]
(年月日未詳) 差出:岩崎甚四郎 宛先:本家

妻お峯に宛てたこの手紙には、紀三井寺村出身の本田鶴吉の世話になっていたこと、その後「けわん」(未詳)にはいつて仕事を始めたこと、賃金のこと、労働環境などについて書いてあります。
ドルを日本円に換算した実質賃金は、その年の好不況や労働人口の多寡、農作物の豊作・不作により変動したようです。この手紙には、「壹円は壹円ニ相成り候、作年は壹円貳拾銭、当年は日本人沢山ゆへ貳拾銭さけ候」と、去年まで(1日)の稼ぎは1円20銭だったところ、日本人がたくさいるために今年は1円に下がった、とあります。
参考として、明治23年(1890)ごろの紀三井寺尋常小学校訓導(教諭)の月給は3~7円でした。同25年ごろの酒一升の代金は15銭です。また同33年(1900)ごろの日雇人夫の日給は18銭、大工職人は25銭でした。
労働環境については、午前5時から日没まで暑さに困り、寝るところも牛小屋のようで寝床も暑さで暖かくなっていたため、とても休まる状況ではなかったようです。

この手紙では、冬は5か月ほど雨がちの天気で、雨に濡れながら働かなければ金は儲けられず、2~3日も濡れて働くところにも困り甚四郎も「米国の(辛抱)の(辛抱)は中々えろうござり升」と嘆息しています。
このように、夏は暑いなか、冬は雨に濡れて労働に動かしお甚四郎ですが、ほかにも金を稼ぐ方法を模索していたことがこの手紙からうかがえます。
甚四郎は、息子の敬三郎をアメリカに來させるつもりなので、紀三井寺村出身でアメリカ帰りの猪川清太郎という人物に「(英)学、すなわち英語を習わせてほしい、言葉の使い方を教えてもらえと言ってほしい、と富三郎に頼んでいます。